

JCCA 社団法人 建設コンサルタンツ協会 懸賞論文
2009 年度 懸賞論文 「みなさんはどのような街に住みたいですか」

「五感を刺激する街」

学校名：木更津工業高等専門学校

学部名：環境都市工学科 5 年

氏名：石井 勇樹

この企画は先生の紹介により知りました。

第1章 はじめに

住みたい街の条件とは一体何なのだろうか。私は現在、最寄りの駅から 3km 程のところに住んでおり、都心までは 1 時間半と決して交通の便が良いところではない。このような土地に住んでいると交通の便が良いところに憧れを持つものである。交通の便が良いところには人が集まり、商業施設や病院などの施設も自然と充実してくるはずだろう。

しかし交通の便の良いところが住みたい街なのだろうか。私は交通の便の良さや施設の充実があくまでも最低限の条件であり、この条件のみ満たされても住みたいとは思わない。

この論文を書くにあたり、あらためて住みたい街の条件を考えてみたところ「五感を刺激する街」というテーマにたどり着いた。本論文ではテーマを「五感」とし、第二章では五感で感じる住みたい街の条件を挙げる。第三章では第二章で挙げた住みたい街の条件をまとめ、私の理想に最も近い街の例を挙げる。

第2章 五感で感じる 住みたい街

私は旅行をするのが趣味であり、全国の数多くの街を訪れた。訪れた街ごとに個性があり、海が見える坂の街、空気のおいしい街、食べ物がおいしい街など・・・住んでみたいと思う街が多々あった。この章では、「視覚」「聴覚」「触覚」「味覚」「嗅覚」の五感によってそれぞれ感じる住みたい街の条件を挙げてみる。

「視覚」 色と開放感がもたらす「くつろぎ」と「癒し」

視覚で感じる住みたい街について考えてみた。五感の中でも最も想像しやすいのではないだろうか。この節で挙げる住みたい街の条件は、視覚以外の五感にも大きく関与しているので重要な内容になる。「色彩効果」と「解放感」をキーワードに展開していく。

突然だが私は緑の多い街に住みたいと思う。並木道のある住宅街は個人的に強く魅力を感じる(図-1)。並木道は日陰をつくり、旅人たちに休息の場を与えていた¹⁾という背景がある。

なぜ緑の多い街は魅力的なのだろうか。ここに私は「色彩効果」というキーワードを取り入れると解決するものだと思う。緑の多い街には、森林や樹木が茂っており緑に加え茶のものが多くは加えられている。表-1によると緑には「くつろぎ」や「休息」、茶には「穏やか」や「落ち着き」といった効果が見られる。住む空間にとって必要なキーワードが並んでいる。また緑や茶に限らず、自然の豊かな街は季節によって色の変化が楽しめ、私たちの目を楽しませてくれる。このように私たちは色の効果を自然と影響を受けているのである。



図-1 並木道がある街の風景（筆者撮影）

表-1 主な色の色彩効果²⁾

赤	情熱，危険，激しい，革命，命，エネルギー，晴れやか，派手，勇気
黄	日光，明るい，はつらつ，まぶしい，元気，子供っぽい，派手，注意
緑	若々しい，安らぎ，安全，平和，くつろぎ，新鮮，休息，潤い，中性的
青	誠実，沈静，信頼，理知的，冷静，落ち着き，寂しい，静か，冷たい
茶	素朴，穏やか，自然，田舎，地味，渋い，落ち着き，伝統，クラシック

「色彩効果」からはなれるが開放感のある街も住みたい街の条件の一つと私は考える。例えば電柱を地中に埋めることで景観がすっきりし開放的な街並み生まれる。都心部ではビルが乱立しており広々とした空を見ることはあまりないだろう。実際に電線地中化をセールスポイントとして売り出している街があるくらい「開放感」は重要だといえる。日中は閉塞的な生活を送っているからこそ、プライベートタイムは開放感溢れるところで過ごしたいものだろう。

「色彩効果」と「開放感」というキーワードから緑の多い街、開放感のある街という具体的な像が浮かんだ。これらの住みたい街に求めるものは、プライベートタイムに対する「くつろぎ」や「癒し」だといえる。視覚的に感じる「くつろぎ」や「癒し」もあるが、聴覚的に感じる「くつろぎ」や「癒し」もあるのではないだろうか。次の節では、聴覚で感じる住みたい街を考えてみる。

「聴覚」 自然音が奏でるリラックス効果

音で感じる住みたい街を考えてみた。視覚で感じる住みたい街の像に緑の多い街を挙げたが、言い換えれば自然豊かな街でなる。自然は、目からのみでなく耳から感じることはないだろうか。

多くの人が休日に地方へ行って自然と戯れたことはあるだろう。川のせせらぎ、波の音、虫や鳥の鳴き声を聞いていると「くつろぎ」や「癒し」を与えてくれる（図-2）。なぜ川のせせらぎは「くつろぎ」や「癒し」を与えてくれるのだろうか。この問題を調べていると「波」と「1/f ゆらぎ」というキーワードにたどりついた。



図-2 心地よい川のせせらぎ（筆者撮影）

「 $1/f$ ゆらぎ」は予測できない変化と表現でき、風も強く吹いたり、弱く吹いたりするので $1/f$ ゆらぎをもつものの一つとして紹介されている。³⁾ この本の中では風のゆらぎを筆頭に川のせせらぎなど自然現象には多くの $1/f$ ゆらぎがあるといっている。この $1/f$ ゆらぎに密接に関係しているのが「波」である。人間が快感を得たときに分泌される脳波の一つであり、波の周波数のゆらぎが $1/f$ ゆらぎになるといわれている。 $1/f$ ゆらぎは波の分泌を高める力があり、 $1/f$ ゆらぎをもつものは生物に快適と感じさせる力があるのだ。

現実的に考えてみると自然音が溢れるところは数限られており、特に住みたい街の条件となると交通の便や諸施設の充実との両立が求められる。やや現実味のない街の像となってしまったが、自然音で売り出す街が出てきても十分良いと思う。音で売り出せば自然と景色も追いついてくるだろうから、私は魅力的な街になると思う。

「嗅覚」 清澄な空気のもとで暮らす

この節では匂いで感じる住みたい街について考えてみる。考えてみてもなかなかピンと来ないものだが、空気のおいしい街に住みたいと思わないだろうか。私はかつて土砂を積んだダンプが頻繁に走る場所に住んでおり、その影響もあり喘息を患った。現在の場所に移り住んでから発作がほとんど起きなくなった。私は空気のおいしい街に住んだら喘息の発作が減ったという経験を通して、空気のおいしい街に住みたい街の条件として提案したい。

日本では、高度経済成長期に公害が流行した。特に水俣病や四日市ぜんそくは非常に有名である。今は環境基本法により有害物質の排出に規制がかかったが、人間が産業活動をする以上、有害物質は排出される。このような状況の中でいかに有害物質と無縁に過ごしていくかが健康的に過ごす鍵になると思う。多くの自然がおいしい空気を生み出すと考えれば、これもまた自然が豊かな街とリンクしてくる。



図-3 市街地に立地する工場（筆者撮影）

かつては産業活動によってその地に住む人が増え、街が活性化した。市街地の近くに工場があることは珍しくないことを考えると空気の美味しい街に住むことは難しかったかもしれない(図-3)。しかし近年の環境志向の整備により、こういった問題は減ったと思う。これまでの視覚や聴覚ではなかった健康的に暮らせる街に住みたいと感じるのではないか。

「味覚」 食べ物がおいしい街

味覚で感じる住みたい街といえば、すぐに思い当たるのが食べ物のおいしい街だろう。私の中で食べ物がおいしくて住んでみたいなと思った土地が北海道である。北海道は海の幸から山の幸まで食べ物に関して何の文句もない。北海道の人々は日頃からおいしいものを食しているのだと考えると羨ましい限りである。

表-2 2007年度住みたい街ランキング

1	神奈川県横浜市	11	東京都港区
2	京都府京都市	12	東京都目黒区
3	北海道札幌市	13	北海道函館市
4	沖縄県那覇市		愛知県名古屋市
5	沖縄県石垣市	15	宮城県仙台市
6	東京都世田谷区	16	北海道小樽市
7	兵庫県神戸市	17	東京都武蔵野市
8	大阪府大阪市	18	沖縄県宮古島市
9	福岡県福岡市	19	千葉県浦安市
10	神奈川県鎌倉市	20	東京都新宿区

私が推した北海道であるが実際に裏付けるデータがある。表-2を見ていただきたい。インターネットサイト「生活ガイド」が調査した「2007年度 住みたい街ランキング」では、上位20位中3都市が北海道であった。首都圏の街や大都市が多くランクインするなか北海道が3都市挙がっているのは食べ物のおいしい街という条件が反映されたものではない

だろうか。

それほど住む上で重要な指標として聞かれない食べ物がおいしい街という条件 私は「衣食住」という言葉があるように住むことと食べることは密接な関係があるのだと思う。

「触覚」 歩きやすい街づくり

最後に触れて感じる住みたい街である。私が提案したいのは歩きやすい街である。私が地方でずっと生まれ育ったのも大きく影響しているだろうが、渋谷のスクランブル交差点のように年中人ごみのところは歩きにくくて仕方がない。住みたい街の条件に開放感のある街と前述した。狭い道と広々とした道、どちらを歩きたいかと言われれば広々とした道と答えるだろう。広々とした道は開放感のある街と密接に関わってくる。

近年整備された住宅街には広々とした歩行者専用の道が設けられることが多くなった。全国の自治体でも歩きやすい街づくりを掲げているところが増えている。既に実感できるところも私の身近なところにはあり、千葉市緑区にある「四季の道」である。春から冬までの道が整備されており全線を通じて四季を感じることができるという特徴がある。

歩きやすい街を整備していくうえで「四季の道」のように自然を増やしていくのは有効的だと考える。歩くことで触覚を刺激し、四季の変化を五感で感じることができる。五感を刺激する街は「歩きやすい街」に集約されるといっても過言ではないだろう。

第3章 私の住みたい街

視覚	緑の多い街，開放感のある街	聴覚	自然豊かな街
嗅覚	空気のおいしい街	味覚	食べ物のおいしい街
触覚	歩きやすい街		

第二章で述べた五感を刺激する街をまとめてみよう。交通の便などの最低限の条件を満たしかつこれらを全て満たす街があれば私は何も文句ないだろう。条件を見てみると重複している点も多々あるように思える。始めのほうで住みたい街には「くつろぎ」と「癒し」を求めているのだと述べた。都市と程よい距離にありながら自然が豊富で健康的に過ごせる街が五感を刺激する街の条件としてまとめられる。

最後に私の思う最も理想に近い街を紹介して本論文を終わりにする。北海道に北広島市という街がある。アクセス面は鉄道利用で札幌市街まで15分、新千歳空港まで20分と抜群である。北海道のベッドタウンと成長しており、商業施設も急増しており平成22年春にはアウトレットモールが開業する予定である。これらの最低限の条件に加え、北海道ならではの雄大な大地が開放感を演出してくれ、清澄な空気をとともに生活することができる。林野庁が制定する森林浴の森百選に選ばれている野幌森林公園があるなど自然が豊富で健康的に過ごせる街という要件を満たしてくれる。

従来は自然が豊富となると都市から離れた土地というイメージだったが、近年の環境志向の都市開発により都市と程よい距離にありながら自然との共生をテーマにした地域が増えている。私の住みたい街が更に増えてくれることを期待したい。

文 献

- 1) 浅井建爾,「道と路がわかる事典」日本実業出版社,東京,2002.
- 2)「カラー効果・色彩マジック」<http://www17.ocn.ne.jp/~lookingu/astrocolor02.htm>
- 3) 武者利光,「ゆらぎの発想」日本放送協会出版,東京,1995.